特別インタビュー

よろずクリニック 萬憲彰 院長に訊く

私のがん治療

それぞれの治療法を活かしたがん治療を「統合腫瘍治療」と呼んでいます

取材・構成 吉田 繁光 本誌発行人

萬 憲彰院長

地元に戻って腰を落ち着けて診療にあたりたい

——まず、先生のご経歴を簡単にお話しください。

萬 平成15年に北九州にあります産業医科大学を卒業しました。卒業後は、鳥取大学の第2内科に2年間勤務した後、約4年間にわたり済生会江津総合病院に勤務しました。その後、倉吉市の十字会野島病院で消化器内科に勤務し、消化器全般を診ながら血管内治療の肝がん塞栓術なども行いました。

しかし、地元に戻って腰を落ち着けて診療にあたりたいとの気持ちが強くなり、平成23年に父が外科医として開業していた医院を引き継ぎました。

——医師になられたきっかけは、お父様が医師だったからでしょうか。

萬 いいえ。私は幼いころからレールの上を歩くのが嫌で、周りから医師になるものと決めつけられていることに反発しました。大学進学の際も両親からは医師になることを勧められていましたが、自身では「どうしたものか」と進路に迷っていました。しかし、信頼のおける方のアドバイスをいただいたのがきっかけで医師の道を選びました。

東京などに行かなくても治療が受けられる施設が必要

——結果的には親孝行にもなり、良い選択をされたのではないでしょうか。

ところで、先生は広く治療法を求められ、統合医療医として診療にあたっていらっしゃいますが、統合医療を取り入れられるようになったのはなぜですか。

萬 統合医療は保険診療が認められていないものがほとんどで、医師のなかには否定的な意見がよく聞かれます。私も勤務医のときは同じく統合医療を否定していました。

開業した後も同じ思いでしたが、高齢でスキルス胃がんの患者さんがいらして、2週間に1回東京まで免疫療法も受けに行く予定とのことでしたので、移動の負担を減らそうとここで受けられるようにしました。さらに、「費用面は気にせず、できる限りの治療を行って」とのご家族の要望に応えて、がん治療につきものの副作用がほとんどない、高濃度ビタミンC点滴療法、遺伝子治療、サプリメント療法などを行い、一時的には効果が見られご家族も満足されました。

このような経験から、鳥取県内の人が県外に治療を受けに行かなくても治療が受けられる施設が必要だと考えたのですが、県内の医師は誰も行っていなかったのでそれなら「自分がやろう」と思ったのがきっかけです。

——脳卒中や心筋梗塞などの一刻を争う病気は患者さんに治療の選択肢は少ないですが、がんは患者さん自身が選択できる病気だと思います。県内の患者さんの治療の選択肢を増やされたことは、喜ばしいことです。

萬 ところが、私が講演活動も行っているからかもしれませんが、意外なことに県外から多く患者さんがいらっしゃっています。大阪、東京、広島、四国各県などからいらっしゃるので、友人の不動産業者に協力してもらい、簡単に滞在できるようなお部屋も用意しています。

——空港からタクシーで10分と、高アクセスの地にクリニックがあるので、県外からも受診しやすいこともあるのだと思います。

それでは、先生のがん治療についてお考えをお聞かせください。

萬　私は標準治療を否定しているわけではありませんので、標準治療も含めたそれぞれの治療法を活かしたがん治療を行うべきだと考えていて、この考えを「統合腫瘍治療」と呼んでいます。

具体的には標準治療と並行もしくは単独で、免疫療法、遺伝子治療、血管内治療、複合ハーブ療法、ホルミシス療法、高濃度ビタミンC点滴療法、マイクロウエーブ温熱療法、コロイドヨード治療、水素療法、ミトコンドリア活性化治療などを組み合わせます。

さらに、治療のベースとして食事療法、基礎体温の上昇、メンタルケア、ホリスティック療法を取り入れます。

よろずクリニック外観

ジェネピック療法は、がん細胞へのエネルギー抑制により効果を発揮します

――たくさんの治療法を取り入れられていらっしゃいますね。選択肢が多いということは治療に切れるカードが多いということですから、良いことだと思います。よく知っている治療法もあれば、名前だけくらいしか知らない治療法もありますので、それぞれ簡単にご説明いただけますか。

萬　高濃度ビタミンC点滴療法、水素療法などの抗酸化療法は、がん治療とともに予防にも有効です。どちらも、それぞれビタミンCと水素を使って患者さんを抗酸化状態にして、がんが嫌いな体質にします。予防目的では月に1回でもよいのですが、治療で受けられる際は、当初は週に2～3回受けていただく必要があります。

自由診療の受付と待合室

進行がんの患者さんには、免疫力を高めることを第一の目的とします。免疫療法やジェネピックという複合ハーブを使います。免疫療法は、採血して培養施設で免疫細胞を増やし、患者さんの体内に戻す治療法です。副作用はほとんど見られませんが、オーダーメイドの治療となりますので費用が高いのが難点です。

点滴はゆったりと横になって受けられる

ジェネピック・複合ハーブ療法は、FDA（アメリカ食品医薬品局）が行った前立腺がんステージⅣの患者さん60名の臨床試験で、59名のがんが消失したという驚くべき結果を出した治療です。急激な成長を繰り返すがん細胞へのエネルギー抑制により効果を発揮します。そして、副作用はありません。

さらに進行している患者さんには、遺伝子治療とコロイドヨード治療などを行いますが、肺がんにはマイクロウエーブ温熱療法がよく効きます。

遺伝子治療は、P53などのがん抑制遺伝子により、がん細胞の増殖を止めアポトーシス（自死）に導く治療法です。こちらも副作用はまずありません

コロイドヨード治療は、その滅菌効果から体表でのみ使用していたヨード（ヨウ素）を人体に取り込むことができるようにコロイド化されたものを使用する治療法です。老化や炎症を起こした細胞とともにがん細胞に有効で直接に攻

水素療法室にはテレビも完備されている

●医療法人医新会 よろずクリニック
〒689-0202　鳥取県鳥取市美萩野 1-118-4
TEL：0857-59-0433　http://yorozu-cl.com/

撃しますが、正常細胞は攻撃せず逆に活性化させます。

マイクロウエーブ温熱療法は、がん細胞が正常細胞より熱に弱いという特性から、がんにマイクロ波を照射させることによって、がん細胞を温め死滅させるというものです。

――これだけの治療法を習得されたことに敬意を表します。週末にセミナー出席のために車で東京まで行かれて、月曜日の開院前までに戻られたこともあったそうですね。そのようなご努力により学んでこられた治療法は、どれも期待の持てるもので今後のさらなる発展に期待しています。

萬　まだまだ取り入れたい治療法は多くあり、今後も増やしていく予定です。

マイクロウエーブ温熱療法は、がん細胞が熱に弱い特性を利用している

どの治療法も自由診療なので、保険診療と比べれば費用がかかります。そこで、比較的安価な治療法で効果の得られるものも取り入れています。アルテスネートというマラリアの治療薬で、この薬に抗腫瘍効果もあることがわかりました。ちなみに、この薬の開発者であるトゥ・ヨウヨウ氏は2015年にノーベル賞を受賞しています。

「糖質を摂り過ぎると、がんに全部行ってしまいますよ」とお話しします

――食事やメンタルケアはどうされていらっしゃいますか。

萬　食事については全身のがんを発見する検査にブドウ糖を使用するPET－CTを例に、「糖質を摂り過ぎると、がんに全部行ってしまいますよ」とお話しし、糖質を極力抑える指導をしています。

メンタル面に関しては「利他・愛・ワクワク」、つまり人のために何かして自身がワクワクすることをお勧めしています。こうしますとがん抑制遺伝子が活性化し、逆にストレスや悲観はがん抑制遺伝子のスイッチが切れてしまいます。

――最後に、がん患者さんにメッセージをお願いします。

萬　大事なことは、受けられている治療法を2～3カ月経ったら評価してみることだと思います。先ほどお話しした治療法も、劇的に効いた方もいればあまり効果が得られなかった方もいらっしゃいます。ほんとうに今受けている治療が効いているのか、マーカーや画像で客観的に評価することが必要です。効かない治療を漫然と受けていては、残り時間が無くなってしまいます。

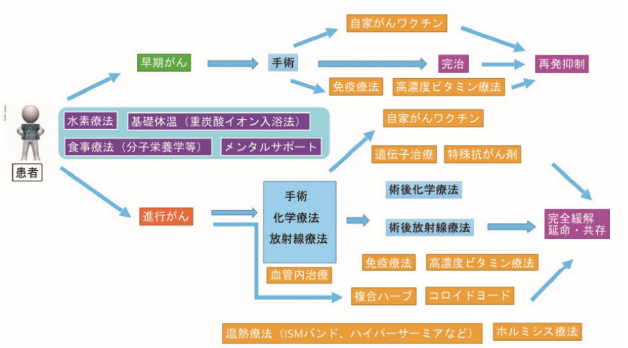
そういった意味では、少しでも早い段階で治療を受けて多くの治療法を試されたほうが、効果的な治療法に巡り会える可能性が高まると言えるでしょう。気付いた時点からすぐに、多くの治療法の中から自身に合ったものを信頼のおける医師と相談して受けてください。

統合腫瘍治療とは

標準外治療は代替補完医療・代替医療・統合医療などと表現されることが多いが、標準治療の長所と標準外治療の長所を生かしたがん治療を今回統合腫瘍治療と表現する

主に手術、抗がん剤、放射線治療などの標準治療のほかに単独または複合的に免疫療法（自家がんワクチン・培養型免疫療法）、遺伝子治療　選択的抗がん剤治療（DDS・血管内治療）複合ハーブ療法（ジェネピック・G&CV）、ホルミシス療法、高濃度ビタミン療法、温熱治療、コロイドヨード治療、水素療法　ミトコンドリア活性化治療などを組み合わせて行う

患者の治療ベースには食事療法（分子栄養学）や基礎体温上昇（重炭酸入浴法）、メンタルケア　ホリスティック療法などを用いる



統合腫瘍治療の流れ